

ツや、ブウツや……(きゆうに名まえをよびながら戸口から出て行く)

舞台にあかりの色だけさびしく残る。——ブウツをよぶ声だんだん遠くなる。

(幕)

その三

雪と氷にとじられたさびしい野原。時間はいつともわからない。

——が、夜でも夕方でもないだけにはたしかである。——風たえずふく。

ブウツ登場。

ブウツ (風にさからいながらいつししょうけんめいにあるく。——ひとしきり強い風にふきつけられて思わずよろける。——帽子ぼうしをふきとばされる。——やつのこと拾ってほつとためいきをつく) ああひどい。——北風のおじいさんのそばへ来ると眼もあけられない。——(はうように今度はからだをこめて歩く)

間。

またひとしきり強い風ふく。——ブウツ、たまらずそこへ四つんばいになる。——ぐたりと倒れる。

「北風」登場。

「北風」 なんだ?——なにをしているんだ、そんなところに?

ブウツ なんにもしていやしません。——ああ、あるけないんです。(苦しそうに息をきりながらい

う)

「北風」 どうしてあるけない?——どこからだでもわるいのか?

ブウツ そ、そうじゃありません。——そうじゃないんです。——おじいさんが、——おじいさんがあんまり……

「北風」 あんまりどうした?

ブウツ あんまり風をふかせるんで——あんまりふかせるんであるけないんです。

「北風」 いくじのないやつだな。——じゃア少しのあいだよしてやろう。(風、やむ) さア、いいだろつ。

ブウツ おこしてください。——手をひっぱってください。